

第124回 令和7年11月14日（金）

「感謝と功績について。」

海外の受賞スピーチを見ていると、ほとんど第1声は身近なスタッフや家族への感謝から始まります。海外の小説にも巻末に「謝辞」といってお世話になった編集者や出版社、そして最後に家族への感謝がつづられています。冒頭に「親愛なる〇〇へ」などと書かれていることも多いですね。

ここに出てくる名前の人物は作者や受賞者以外誰も知らないことがほとんどですが、そのスピーチや謝辞を見て嫌な気持ちになることはありません。

日本の小説で謝辞を見ることは少ないですし、スピーチも「まさか私がこんな賞を頂けるとは」という謙遜はあっても、周りの感謝から入ることはあまりないかもしれません。（それでも最近が増えてきました。昔は内助の功と言って妻への感謝はあまり口にしない風潮がありました。）

功績と言うのは多くの場合一人で創れるものではありません。必ず表には出ませんが陰で支えてくれる人がいます。例えばノーベル賞でも研究を手伝ってくれるスタッフや、研究に専念できる環境を作ってくれた家族、ここまで育ててくれた両親などがいるわけです。

賞を取る人は限られており、その名声もその人に与えられます。陰で支えた人に対しては、賞を取った本人からの感謝だけが唯一報われるご褒美になります。

織田信長の名前は残っても、桶狭間で戦った兵士の名前は残りません。兵士にとっては信長からの感謝だけが糧となります。

残念ながら功績を残すとあたかも自分一人で成し遂げたかのように誇る人がいます。もちろん功績はその人について回りますから、その後も長く称賛を受け続けることになります。

そのような人は功績を手放すと自分がどうなるかをわかっています。地位にしがみついて離れられなくなってしまう、過去を話すことで自分の存在を証明し続けます。

反対に感謝をする人は栄光を手放すことも簡単にできます。栄光で自分の周りに人がいるわけではないことをわかっているからです。そのような人は新しいことに挑戦できますし、結果的に豊かな人生を送ることになります。

みなさんの中にも実績を残す人はたくさんいると思います。感謝を忘れないようにすることで、自分が縛られなくなり、人間としての幅が広がると考えています。